書評

小川正通訳著

ソ連の幼児教育

山下俊郎

ソ連の文化のいろいろの面は、アメリカとの対立において見られる意味において、かねてからわが国の人々の注意をひいていたのであるが、昨年人工衛生の打揚げの輝かしい成功にわたくしたちのソ連に対する関心はさらに高められてきたかの観がある。わたくしたち、幼児保育に関心を持つものにとっては、ソ連の将来の文化を支配するであろうところの今日の幼児たちがどのように保育されているかということは最も大きな関心をよせる問題である。ところが、この点については、断片的な視察談は今までしばしばわたくしたちの目や耳にふれたのであるが、まとまったものには接することができなかった。

小川正通氏のこの訳著は、東ドイツでドイツ語にほん訳されたソ連のソローキナの著書「就学前教育学教科書」(A. I. Sorokina, Lehrbuch Der Vorschulpädagogik. 1955)を圧縮、抄訳して紹介されたもので、わたくしたちはここにはじめてソ連の幼児教育の全体の姿を、体系的に知ることができることになったわけである。この原著は、ソ連の幼稚園教員養成のためのテキストであり、ソローキナの他に二三人の教育学者も応援執筆した書物だそうである。そして、原著は、二四章八五節から成るぼう大な書物であるが、これを二一章、五九節に圧縮して、要領よくまとめられてある。いままでじゅうぶんに知ることのできなかったソ連の幼児教育をここに紹介して、わたくしたちに新しいいぶきを与えて下さった小川氏に何よりもまず深い感謝をささげたいと思う。

限られた紙面で、内容の紹介をすることができないので、各章の題目だけを順次かかげてみると、次のような題目によってこの書は展開されている。ソ連の教育および教育学の目標、就学前教育の発展、三歳までの教育と集団教育、就学前教育の目標、就学前教育の原則と内容概説、身体教育、日課および衛生的習慣の養成、遊びとその指導(一、二)、仕事とその指導、道徳教育(一、二)、労働による教育、精神教育、国語教育、数教育および美的教育、観察および楽しみとその指導、幼稚園の教育計画と教育活動の評価、幼稚園の組織と管理、幼稚園の教師、幼稚園と家庭、幼稚園と初等学校。

この各章の題目からうかがわれるように、三歳から七歳にいたる幼児にどのような教育がなされているかが、あらゆる面から分るように解説されている。制度として、幼稚園が全部国公立である点は誠にうらやましい限りである。しかし、ここに展開されている幼児教育は共産主義の理念によっておこなわれているものである点については、いろいろ批判する余地もあるようではある。けれども、わたくしたちに新しい視野をひらかせて下さった小川氏のこの好著に教えられるところが多い。あえて一読をすすめたいと思う。

(B6判三一九頁。理想社刊。三五〇円)